

ケアサイクルにおける高齢者のストレスに関する研究

学位論文抄録

令和5年9月

小薮 智子

ケアサイクルにおける高齢者のストレングスに関する研究 学位論文抄録

本学位論文の目的は、高齢者のストレングスを活用した看護実践への示唆を得るために、ケアサイクルにある高齢者のストレングスを明らかにしたうえで、ストレングスの測定尺度を開発し、ストレングスに関連する要因を明らかにすることである。

本学位論文では上記の目的を達成するために、1) ケアサイクルにある高齢者のストレングスの明確化、2) スtrenグス測定尺度の開発、3) スtrenグスに影響を与える要因の検討を課題とした。

第1章では、社会的および研究的な背景から、高齢者のストレングスを活用することの必要性を述べた。また、ソーシャルワークで活用される **Rapp** のストレングスモデルに、ポジティブ心理学で重要性が指摘されているストレングス活用感を組み込んだ、本研究における研究モデルについて説明した。

第2章では、退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングスを明らかにするために、退院支援看護師を対象に半構成面接を行い、内容分析をした結果を述べた。退院支援看護師 15 名に、ストレングスを発揮して自宅退院した高齢者の事例と、共通すると考えられるストレングスを尋ねる半構成面接を行った。質的分析の結果【志向】【自信】【韌性】【能力】【環境・資源】の5つのコアカテゴリーが抽出された。これらは **Rapp** のストレングスモデルの構成概念と類似していたが、**Rapp** のモデルにある「機会」と同じ概念のコアカテゴリーは抽出されず、看護師に「機会」の視点が不足している可能性が示唆された。

第3章では、ケアサイクルにある高齢者のストレングスを測定するための尺度を作成し、妥当性と信頼性を検討した結果を述べた。調査対象は、本研究への参加を自己決定でき、質問紙調査への回答が可能な要支援・介護認定を受けた高齢者、あるいは介護サービス・介護予防サービスを利用する高齢者とし、全国の相談施設や生活施設、介護サービスを提供する事業所、計 1400 か所に質問紙 3 部を送付した。前述した質的研究の結果から、尺度は **Rapp** のモデルに基づき、個人のストレングスである「熱望」「自信」「能力」と、環境のストレングスである「社会関係」「資源」「機会」の6因子を下位概念としてアイテムプールを作成した。ケアサイクルにある高齢者の特徴が質問項目に反映されるよう、前述した質的研究の結果を参考にし、研究者間で議論を繰り返し、内容的妥当性の確保に努め

た。また、外的基準からみた妥当性を確認するため、包括的環境要因調査票（CEQ）と自尊感情尺度を尋ねた。結果「熱望」、「自信」、「能力」、「社会関係」、「資源」、「機会」を一次因子、「個人のストレングス」と「環境のストレングス」を二次因子に仮定した、ケアサイクルにある高齢者のストレングスのモデル構造が最適であるとの結果が得られた。さらに CEQ および自尊感情尺度と有意な中程度の相関がみられ、外的基準からみた妥当性も確認できた。また、 ω 信頼性係数高い値を示し、内的一貫性が確認でき、18項目からなるケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度の妥当性と信頼性が確認できた。

第4章では、ケアサイクルにある高齢者のストレングスの関連要因として、ストレングスが QOL に直接およびストレングス活用感を介して影響し、さらにストレングス活用感に援助者の不適切なかわりが影響すると仮定したモデルのデータへの適合度を構造方程式モデリングにより検討した結果を述べた。対象者と調査方法は尺度開発の研究と同様で、改めて無作為抽出した 3000 施設に質問紙の配布を依頼した。調査内容は、作成したケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度、ストレングス活用感（0～10 の Numerical Rating Scale）、石原らの高齢者の QOL 評価票、援助者のエイジズムに基づく不適切な関わり（著者らが作成した 5 項目）である。分析は、まず各尺度の確認的因子分析を行い一次元性の確認後、仮説の因果関係モデルへのデータの適合度を確認した。230 名が分析の対象となった。仮説モデルへのデータの適合度は統計学的水準を満たした。ストレングスから QOL に直接向かうパス係数よりも、活用感を介したパス係数の値が大きく、援助者の不適切なかわりは、活用感に負の関連がみられた。高齢者の QOL を高めるためには、ストレングスを持っているだけでなく活用している感覚が重要であり、この活用感は援助者の不適切な関わりにより低下することが明らかになった。

第5章では、本学位論文の総括として、総合的考察と今後の展望を述べた。今回、ソーシャルワークで用いられるストレングスモデルに、ポジティブ心理学の知見であるストレングス活用感を組み込み、その関連を明らかにしたことは、本研究の新規性であると考えられる。また、高齢者が今持っているストレングスを増やす介入は難しいが、活用感を高める介入、不適切なかわりを減じる介入、という支援の方向性が明らかになったことは本研究の成果であると考えられる。

主業績

No.	論文題目	著者名	発表雑誌
1	ケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度の妥当性と信頼性の検討	小薮智子, 松田美鈴, 上野瑞子, 井上かおり, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄	日本保健科学学会誌, 第25巻3号, 127-135頁, 2022

副業績

No.	論文題目	著者名	発表雑誌
2	退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス	小薮智子, 原瀬愛理, 井上かおり, 上野瑞子, 松田美鈴, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄	岡山県立大学保健福祉学部紀要, 第27巻, 41-48頁, 2021.